

社会福祉法人 日野青い鳥福祉会

2024年度 法人本部・事業計画

はじめに

2生活介護体制の4年目になる。前年度財務実績から経営的な課題が明白になった。現員の利用率、定員からの稼働率にとどまらず、支援区分の給付単価・収入と職員配置体制との相関が人件費率の高さとして現実的に指摘された。これらの点から経営の見直しに入る年度となる。

1、第3期中期経営計画との関連から

第3期中期経営計画で関係論による支援を深める2年目である。また昨年度の日野、GH、2部署の第三者評価を受けて、生活支援の原則をさらに深める視点に立った。中期計画と第三者評価の整合性を高めるつもりで、生活支援の在り方を考え実践する年としたい。

原理的には以下の点を大事にする。生活支援の枠組みとして、人間観-人との出会い方の中に豊かさがある、障害観-感性的な存在を踏まえて楽しさを行動原理と捉える、関係論-見られ方で安定が左右される存在である、関わり論-よく見れば見え方が変わる等々を承知して「あいうえおの実践」を進める立場を強化する。

暮らしを支えることの本来の意味を探りつつ、生活支援を実践的に進めることになる。

2、重点目標－経営視点

- ① 経営上の課題を堅実に解消する方向で取り組む。
 - ・支援区分の影響力を考慮して上田利用者の実態から2.5：1体制に戻す。
 - ・また稼働率の課題からこの数年かけて順次、利用者増で定員充足を図っていく。
- ② 2生活介護事業体制は連携・協力を前提に効率的な運用をする。
 - ・2事業所連携行事と単独行事との立て分けを進める。
 - ・一方、昨年来から折々に話題になってきた年齢構成への行事配慮、小グループ体制での展開など、意図的に試行してゆく。
- ③ さらにショップ系の課題として、日野市駅前再開発を受けてパン北口店の3年後閉店計画に対する善後策、パン事業の在り方も訪問販売系等の軸を絞って詰めることが求められる時期に入った。
- ④ また開設以来、親の会の応援を頂いてきた高幡店、南平店の運営も諸状況から節目と位置付けて法人の実力に見合う運営を打ち出すことが求められている。
- ⑤ 組織整備を進める
 - ・統括を復活し、理事長一統括ラインで現場を取り仕切る形とする。
 - ・統括体制の遂行力を推し進めるため新たに経理課長を設け、経営領域の適切化を図る。
 - ・またSV体制をさらに強化し各部署の補佐的な役回りとすることで円滑な運営を意図する。

従来の運営課題を承知しながらも、法人全体に及ぼす事案として上記検討事項に積極的に取り組み、次年度に引き継ぐ糸口を絞り込んでいく。

3、重点目標－事業運営視点

(1) 作品展を一つの軸に生活支援の奥行きとして自己表現、持ち味、楽しむ暮らしにウエイトを置く

- ・作品化を軸にすることで個々の持ち味を改めてクローズアップすることになり利用者理解を深める機会とする。
- ・生活支援の柱になる〈楽しく暮らす〉の一つのあり方として自分の関心事を形にする。

(2) プロジェクト体制の下に各領域の課題を整理して法人運営を適切に進める

①2040年問題プロジェクト

- ・財務に限定せず法人課題のあらあらの方針を示す役回りを心得て、大所高所から検討する。
- ・一方、運営委は支援領域の基本方針の検討を担当する。守備範囲を立て分けて法人運営を押し進める。

②エピソードプロジェクト

- ・人材育成また法人の支援の質を向上させる根幹と位置付けてエピソードの質を求める次元に立つ。
- ・個人テーマを浮き彫りにして全体像把握を進める素材とすることで、個別計画の適切性に寄与する。
- ・次の25周年に向けて、〈職員を育てるエピソード〉として捉え方を深めていく。

③内部研修プロジェクト

1)基本的にテキスト「支援のまなざし」の輪読会を部署ごとに継続し、支援の在り方を深め、実力に反映させる。

- ・GH研修、施設長研修、SV研修等を継続する。

2)主任・管理者研修－ケース検討会

- ・まなざし研修の1回分をケース検討会に当て、まなざし本の実務版として展開する。
- ・隔月－日野、上田－で開催する。
- ・担当者、両主任、管理者、SV－他職員はオブザーバー参加等とする。

④ 就労系ミーティング

1) 利用者の社会参加活動の一環であることを周知し、その認識のもとに運営する。社会参加活動を広げる視点で、どのような活動が主体的な取り組みになるか模索する。

- ・働くこと、楽しむことを含めた人生の視点を取り込み、一緒に働くだけでなく、一緒に楽しむ時間を生み出すこと、仲間と一緒に過ごす意義を感じられるように展開する。
- ・パンミーティング、ショップミーティングを随時開催する。

(3) 人材育成に力点を置き、生活支援のあり方を考え、各自の支援観を形作る

- ①「あいうえお」の実践、それを検証するエピソードまとめ、また個別エピソードを読み通す作業を通じて個別テーマを浮き彫りにすることで全体像を把握する。
 - ・全体像の把握と場面展開のエッセンスに即した支援の適切化を進められる実践力を身に着ける。
- ②さらに今“ある”姿を受け止めることが次の姿に“なる”エネルギーとの認識に徹して関わる。
- ③S V体制の強化（3SV 節子、井上、村瀬）でO J Tの充実を図り、人材育成に寄与する。
 - ・特に記録アドバイスに力点を置き、着目点、関わり方、解釈の仕方、先の見通し等を共に深める。

(4) 2040年プロジェクト構想の下に運営委の集団管理体制をとる。さらに統括を復活させ実務運営の柱にする

- ・従来の分担を見直し、各管理者分担の適切化を進め処理効率の良い運営を図る。

4、ガイヘル関連

- ・ガイヘル養成研修の実施はコロナの5類への移行の動きを受けて社会的には開催しやすすい状況になる。実際の影響力を押し量りながら進めることになる。

5、防災関連

- ①能登半島地震を受けて、発災後1週間程度、各部署を利用してしのぐ体制を整備する。
 - ・各家庭の努力を前提とするが、一次避難所の利用は障害から難しい現実を前提に対策をする。
 - ・福祉避難所利用も危ういため、いつもの仲間内で法人各部署を自主避難所として、とりあえずしのぐ場とする。
 - ・避難所設備：ポータブルバッテリー、ソーラーパネル／簡易浄水器／毛布1／ポータブルトイレ薬剤／LEDランタン／カセットコンロ・ボンベ等。
 - ・関連で必要になるものは一感染症関連、歯ブラシ、ポリタン等々の備蓄を進める。

②震度 基本対応

震度	安否	発災時	翌日予定	残留体制	職員体制
5弱	○	帰宅、被害確認	基本開所		
5強	○	速やかに送迎	基本閉所、被害確認		
6	○	道路状況で迎え依頼	基本閉所、自主避難所		

- ・安否確認後、速やかな帰宅を進める。
- ・自主的避難所を即日開設し1週間しのぐ。

③基本は、職務とは言え被災者である限界を承知して職員の協力を求める。不安の中に現場があることも一面の事実であり、それぞれの不安を受けとめて運営する。

・特に迷子、行方不明を出さない。また雨露をしのぐ、基本の食・排・睡の確保、仲間がいることで安心できる環境整備をする。

6、感染症対応

・コロナ5類移行を踏まえて社会的な受け止め方に留意して進める。感染力は強く注意を継続していく。

・インフルエンザ、コロナ等に関して社会通念上の扱いとし、自宅待機の協力等感染予防の配慮を進める。